

～ 巻頭言 ～

遠く離れても心は一つ Jauh di mata , Dekat di hati



学習院大学法学部・法科大学院教授

草野 芳 郎

1 私は、平成19年3月から、独立行政法人国際協力機構（JICA）が実施し、法務省法務総合研究所国際協力部（ICD）が協力している「インドネシア和解・調停制度強化支援プロジェクト」の短期専門家を引き受け、現在、インドネシア最高裁判所の和解・調停に関する規則の改正と和解・調停の技術指導の法整備支援に当たっています。

表題の「Jauh di mata , Dekat di hati（ジャウ ディ マタ ドウカ ディ ハティ）」は、このインドネシアの法整備支援を引き受けたことにより知った言葉ですが、この法整備支援を成功するためには、極めて重要なマジックワードだなと感じ、座右の銘としているものです。この言葉はインドネシアでは極めて有名な言葉で、jauh は遠い、mata は目、dekat は近い、hati は心を意味し、直訳すると、「目では遠いが心では近い」、意識すれば「遠く離れても心は一つ」という意味になります。

私は、この言葉をプロジェクトのメンバーが、日本とインドネシアに分かれ、それぞれの国においてもプロジェクト以外に本来の職務に従事し、普段は顔を合わせる事のない状況にありながら、心を一つにして、プロジェクト実現に努力している姿に重ね合わせてしまうのです。

2 私は、もともとは裁判官でしたが、満60歳となりましたのを契機に平成18年3月に35年間勤めた裁判所を依願退職し、同年4月に学習院大学法学部兼法科大学院の教授へと転身したものです。裁判所時代の私の座右の銘は「一期一会（いちごいちえ）」でした。この意味は、いつも会っている人に対しても、その時の出会いが一生に一度のものと思って大事にしてくださいというものです。この一期一会は今でも私が大事にしているのですが、空間が限定される感じがして、このプロジェクト実現のマジックワードには適さないような気がします。

何か良い言葉がないものかと思っていたのですが、Jauh di mata , Dekat di hati を知ったとき、これまでにない空間の広がり新鮮さを感じました。このプロジェクトにぴったりの言葉だな、このプロジェクトを引き受けたために私に新しい広がりがあり、新しい人々を知り、新しい言語、言葉を知ったのだなと本当にうれしく思いました。

3 私が、インドネシアの法整備支援をするようになったきっかけは、国際協力部の田中嘉寿子教官から、本プロジェクトのアドバイザー・グループ委員及び短期専門家の依頼を

受けたことでした。私は裁判官時代は、判決よりも和解の方が優れた紛争解決方法であると考え、和解に情熱を燃やし、和解の技術について研究、実践してきましたが、このプロジェクトは、和解についての私の考え方を日本以外の国に伝えよとの天命であると感じ、非常にうれしく思い、二つ返事で承諾したのでした。

私は大学の教授ですから、学生に対する教育、研究が本来の仕事であり、それに専念すべき立場にありますが、大学の教員は広い自由な視野で現実の世界を見て研究することと、自分の学識が社会に役立つのであれば、これを社会に還元すべき義務を負っていると思っています。私が、定年まで5年弱の期間を残して早期に退職したのも、裁判所で燃え尽きるまで頑張るよりも、新しい気持ちで再出発し、社会に貢献しつつ、自由に活躍できる場が欲しいというものでしたから、法整備支援の依頼は願ったりでもあったのです。

4 私は、このプロジェクトを引き受けたものの、インドネシアのことについて何も知りませんでした。インドネシアに行ったことはないし、インドネシアの人に会ったこともないし、法制度がどのようになっているのかも知りませんでした。

でも、私には、何とかなるのではないかという直感がありました。それは、田中教官に会ってみて、その豊富な知識、経験、意欲、責任感に強く信頼したからでした。また、インドネシアには長期専門家として角田多真紀弁護士を派遣して現地で活動していただくということ、国内ではアドバイザリー・グループを結成して専門家を結集し、各種のサポートをするということ、特に通訳では、日本でも最強のインドネシア語通訳である呼子紀子さんが同行して助けてくれるということが私に自信を与えてくれました。

このように、日本側のメンバーは固まったのですが、私にとってどうしても見えないものが残りました。それは、インドネシア側のメンバーを知らない、インドネシアの風景を見たことがない、空気を吸ったことがないということでした。インドネシア側のメンバーとの円滑な意思疎通がうまくできなければプロジェクトの遂行はうまくいかないということとは間違いないからです。

最強のインドネシア語通訳が同行してくれることは何よりの強みですが、それだけでは意思疎通に何か欠ける、やはり片言であっても私自身がインドネシア語を使う必要があると直感しました。それで、インドネシア語の勉強を始めました。このことが *Jauh di mata, Dekat di hati* と出会い、また、その意味をよく理解することにもなったのです。

5 私が最初にインドネシアのジャカルタを訪問したのは、去年の8月でした。田中教官、呼子通訳と3人で日本を出発し、現地の角田専門家と第1回現地セミナーを行いました。ジャカルタ南地方裁判所訪問、現地セミナー、弁護士事務所訪問、ワーキンググループとの会合など、インドネシア側のメンバーと顔を合わせ、はっきりとしたインドネシアのイメージ、今回の法整備支援のイメージをつかむことができました(現地セミナーの詳細は、田中嘉寿子「インドネシア和解・調停制度強化支援プロジェクト第1回現地セミナー報告」ICD NEWS 3 2号 2 1 9 頁参照)。

完璧な呼子さんの通訳の中に私のブロークンなインドネシア語が交わったとき、インドネシアのメンバーと意思が通じたという実感がし、自分ながら今回の現地セミナーは第1

回としては大成功だったなと感じました。ただ、心が通じたという程度までには至りませんでした。また、インドネシア側の改正原案はとても日本の制度を理解して作られたものとはいえ、まだまだ道は遠いなと感じたことも事実でした。



【2007年8月現地セミナー（中央）】



【WGメンバーの弁護士事務所にて】

6 去年の10月に JICA 大阪で本邦研修があり、インドネシアから12人の方が来日されました。私も JICA 大阪に8日間宿泊し、インドネシアのメンバーの方と合宿しました。その間、親しく率直に意見交換したのですが、インドネシア側の日本の制度に対する理解度も深まり、はっきりと手応えを感じる事ができました。今回は、意思が通じただけでなく、心が通じ一つになったような感じがしました。そして、彼らが帰国した後、改正作業が順調に進み、次の現地セミナーで成案ができることを心から祈らずにはおれませんでした。

本邦研修終了の前日、送別会があり、私は乾杯の音頭を取ることを頼まれました。私は、日本、インドネシアと両国のメンバーは遠く離ればなれとなるが、日本のメンバーとインドネシアのメンバーは心を一つにしてプロジェクトの推進をしなければならない。「遠く離れても心は一つです」と日本語で述べ、最後に「Jauh di mata, Dekat di hati」と挨拶しました。インドネシア側も私の気持ちを察し、「Jauh di mata, Dekat di hati」と唱和してくれました。

私は、このインドネシアのプロジェクトを引き受けたときには知らなかった人達と親しく力を合わせ、共通の目標に向けて努力している自分を見て、また、私の経験が役に立つということを感じて、本当にうれしく思いました。

7 今年の3月には、第2回現地セミナーでインドネシアを訪問します。インドネシア側のメンバーとの再会です。プロジェクトは始まったばかりで、目標はまだ遠くにあります。しかし、プロジェクトメンバーは、遠く離れても心は一つなのですから、現地セミナーで再会したらなお一層心が一つになり、このプロジェクトが推進されるものと期待しています。